信者と政治

矢内原　忠雄

キリスト者はこの世の政治問題に対し、どのような態度で対処すればよいか。これは先般安保闘争、民主主義擁護闘争に際して、誰しも一度は考えた問題であろう。「わが国はこの世のものならず」(ヨハネ伝一八の三六)だから、われ関せずの超然たる態度でいるのがよいか、それとも正義と平和のふみにじられるのを坐視することはできないとして憤起するか。これは一般的には、この世に処する信者の生活態度の問題であると言えよう。

この問題の参考として、先ず人間の肉体のことを考えてみよう。永遠の生命は霊的生命であって、肉は益なしであるから、肉体の健康の維持や病気の治療については無関心でいてよいか。肉はどうせ朽ちるものだとすれば、朽ち行くものの維持のために心を使うことにどういう信仰的意味があるであろうか。

われわれが肉体の健康に心を用いるのは、次のような理由によるのである。

第一に、肉体は神の創造し給うたものであるから、これを大切に取り扱わねばならない。

第二に、肉体は聖霊の宿る宮である。人が肉体をもって生きている限り、人の霊的生命と体の生命とは不可分に結びついているから、霊的生命が地上で生きるためには、肉体の生命をも維持しなければならない。

第三に、肉の肢体は人間が活動するための器である。それは、用いる目的によって不義の器ともなり義の器ともなるが、神と人のために義と愛を行う器となるために、肉体を大切に扱わねばならない(ロマ書六の一三参照)。

こういうわけで、肉体の健康維持や病気治療の努力にも十分の信仰的理由があるのである。しかし肉体の健康が人生の至高の目的でないことは言うまでもなく、これを信仰の中心題目となすべきでないことは明かである。肉体は弱くても霊は歓喜と希望に溢れることは、信者にしばしば見られる事実である。肉体はどんなに大切にこれを扱っても、結局は衰えて朽ちる。この事実を認めて、肉にありて生きながら復活の生命を待ち望むことが、信仰的智慧である。

復活の生命を信ずる者は、肉体の生命をも大切にする。それは神の創造の御業を大切にせずには居れず、また肉体を義の器として神にささげずには居れないからである。信仰によって救われた者の感謝が、肉体の健康を大切にさせずにはいられないのである。

2

社会は有機体にたとえられ、国家も政治的な「体」にたとえられる。人間は、信者でも不信者でも、みなひとしくこの有機体もしくは政治体の一構成分子である。

しかるに信者の真の国籍は天にあり、その意味では信者はこの世に所属するものではない。生来の人間としては　この世の国に属し、信仰の人間としては天国に属する。このような二重国籍の問題が、信者にはあるのである。

神は人類を創造し給うにあたり、これを多くの民族・国民に分けて創造し給うた。また孤立した人間として創造し給わず、社会をなして生活する者としてつくり給うたのである。社会である以上、その中に集団生活の組織と秩序があるのは当然であり、それが社会の発達段階に応じて国家権力の形態をとる。それ故本来「あらゆる権威は神によりて立てらる」と、パウロの言ったことは正しいのである(ロマ書一三の一参照)

しかるに、人間の肉体は本来神の創造し給うたものとして潔くかつ善なるものであるに拘らず、罪がそれに宿った結果「不義の器」として用いられることがあると同様に、本来神から立てられた国家社会の秩序として正当であるべき権力も、人間社会に宿るサタンのために悪用されて、不義の器とされることがあるのである。

権力の運用を「政治」と呼ぶならば、権力が「義の器」として運用され、「不義の器」として運用されないことを願い、かつそのために努力することは、信者として当然のことである。政治はこの世の事だからといって、超越的・傍観者的態度を取ることは、神と隣人とを愛する者として、どうしてもできないのである。旧約の預言者はそのために、正義が川のごとく公道が水のごとく流れることを求め、貧者・孤児・寡婦の権利をまげることなく、その訴を聞く政治を要求した。イエスは偽善にして愛のない学者・パリサイ人を攻撃し給い、使徒時代以後多くのキリスト者が正義のために世の悪と戦ったのである。

3

政治は　この世の問題であるから、この世の人と協同して、同じ目標にむかって行動することがある。しかし信者は同時に神の国に所属するものであるから、政治に対する態度も、おのずからこの世の人と異るところがある。

第一に、信者の政治的目的は神の正義と公道と平和を世に行われしめ、神の栄光を現すということにあるのであって、自分や自分の党派の権力慾を満足させ、この世的利益を獲得しようとするのではない。それ故、信者の政治的行動がこの世の人の権力愁のために利用されるおそれが濃くなれば、それから手を引くことが賢明である。

第二に、信者の政治的行動は、その目的においてだけでなく、その手段方法においても神の是認し給うところでなくてはならない。インドのガンジーが組織した国民運動は、非暴力主義を指導精神とした。彼の指導した国民運動が暴力化の徴候を示すと、彼は直に運動の中止を命じ自分は国民の罪を悔いるために断食に入った。イエスを信ずる者の行動が、ヒンズー教徒であるガンジー以下のものであってはならないのである。

第三に、この世にあって神を信ずる純粋な動機から正義の声をあげる者は、必ずといってよい位、少数者として権力者からは弾圧され、この世の人から裏切られる。信者はこの世における活動によって己の利益を求めないのみか、己の利益を、しかり、ある場合には己の身体・生命をさえも害される。その場合、己を打つ者を打ち返してはいけない。「愛する者よ、自ら復讐すな、ただ神の怒に任せまつれ」(ロマ書一二の一九)と、パウロの言っている通りである。神の正義を主張す

る声はアダマント(金剛石)のように強硬に、己の利益を奪う者に対しては羔羊のように無抵抗であるのが、信者の道である。

第四に、この世の政治の改革を主張しても、必ずしもその目的を達しない。部分的もしくは一時的に目的を達したように見える場合でも、全体的かつ長期的に見れば、この世の政治はサタンの巧妙な手に握られることを知るのである。それならば我らは失望して、この世をよくする努力から手を引いて、寡婦・孤児の訴に耳をふさぐべきかと言えば、神の愛が我らに迫って、そのような利己的態度を許さないのである。

それならばわれわれは空しい努力と知りつつこれを続けるのであるか、と言えば、キリスト再臨による終末的希望がわれわれを支えるのである。

サタンが人を動かす限り、この世の政治は神の御心に適う状態にはならぬであろう。しかしキリストが再臨して審判を行い、サタンを滅し給う時には、神の国は地上に現れる。然り、この地上においてである。神の国は人の住む地上を離れて、虚空の世界に実現するのではない。地上において神の民が正義のために戦った実績は、ことごとく神の国の組織の中に取り入れられて、その柱となり、宝石となるであろう。

目に見える兄弟を愛しない者は、目に見えぬ神を愛するとは言えない。目に見える肉体を粗末に扱う者は、目に見えぬ復活体を重んずる者とは言えない。目に見えるこの世の正義と不義に無関心な者は、目に見えぬ神の国に忠であるとは言えないのである。

(『嘉信』第二十三巻第九号・昭和三十五年(一九六〇年)九月)

預言者の精神

矢内原　忠雄

旧約聖書の「預言者」という原語には、「ナービー」「ローエー」「コーゼー」の三種があるが、この中最も多く使用されているのは「ナービー」であり、「遣わされて告げ知らせる者」という意味のアラビヤ語から出たものであろうと言われる。われわれはそれが新約聖書にある「使徒」という語と共通の意味をもつことに、直ぐに気付くのである。神から遣わされて、神の御言を人に伝えるものが旧約の預言者であり、キリストから遣わされて、キリストの福音を人に告げ知らす者が新約の使徒である。

若きイザヤは、「われ誰をつかはさん。誰か我らのために往くべきか」というエホバの御声を聞いて、「われここにあり、我を遣したまへ」と答えた(イザヤ書六の八参照)。これが彼の預言者としての召命であった。また、「それ主エホバはその隠れたる事をその僕なる預言者に伝へずしては何事をも為したまはざるなり。獅子吼ゆ、誰か恐れざらんや。主エホバもの言ひ給ふ、誰か預言せざらんや」というのが、預言者アモスの召命であった(アモス書三の七、八参照)。その他すべての預言者が、神から遣わされて神の御言を人に告げ知らせる使命をもつ者であった。

「ローエー」「コーゼー」の原意は、共に「見る者」の意味であろうと言われる。神の啓示を見て、これを人に伝える者が預言者である。これは旧約ではダニエル書(紀元前第二世紀)、新約ではヨハネ黙示録のような、「啓示文学」という形

をとって発達したのであるが、要するに神の御声を聞き、神の啓示を見て、これを民に告げ知らせる者が預言者であった。

こういう意味では、モーセも預言者であると言ってよいが、預言者という階級ができたのはサムエル(紀元前第十一世紀)以来であり、エリヤ、エリシャの時代(第十世紀)にも各地に預言者の集団のあったことが記される。彼らはサムエル書、列王紀のような貴重な資料を記録し、もしくは保存した功労者であると認められるが、特に秀でた預言者たちの輩出したのは、紀元前第八世紀の半頃、アッスリヤの軍事的侵略がイスラエル王国を滅した頃から、第六世紀初バビロン軍によってユダ王国が滅び、いわゆるバビロン捕囚を経験した時代、ならびに第六世紀後半、バビロン捕囚の終った前後であった。すなわち亡国の危機を背景として、神はすぐれた預言者たちを遣し給うたのである。

預言者によって神の与え給うた警告は、第一に宗教の腐敗、すなわちエホバに対する純粋かつ真実の愛を離れて偶像礼拝の風に染みた民の罪を指摘することであった。第二に政治の腐敗殊に貴族富者が貧者弱者の土地を奪い、孤児寡婦の権利をふみにじる罪を指摘することであった。かつ外交的には国の独立を防衛するため他の強国と軍事同盟を結び、それに伴って自国の軍備を修め、戦争政策を取ることがかえって国の独立を危くすることを指摘し、エホバに依りたのんで平和政策をとることこそ、国の独立を防衛する道であることを主張したのである。預言者の与えた第三の警告は、国民が経済的繁栄と安易な生活にふけって、道徳のゆるんだ罪を指摘することにあった。

国民の罪を指摘し、悔改めて真実の信仰にかえらざる限り、虚偽の繁栄と平和にかかわらず国の滅亡は必至であることが、すべての預言者に共通の声であった。彼らはその為めに国民から嘲けられ、迫害され、孤独であり、孤立した。しかし神から遣された告知者として、彼らは神の御言を語らざるを得なかったのである。

しかしながらエホバは、国民の罪の故にこれを罰し給う神であると共に、また神の選びの故に国民を赦し、これに希望をもたしめ給う神である。すべての預言者がひとしく、神の審判の後に、神の救の希望を告げ知らせた。儒教に「先憂後楽」という語があるが、イスラエルの預言者は衆に先んじて滅亡の運命を憂い、衆に先んじて廃墟の中から復興の希望を楽しんだところの「先憂先楽」の士であった。彼らは世論に聞いて行動せず、神に聞いて語った。それ故に彼らは常に孤独であった。

「国破れて義人出で、家貧しくして孝子出づ」という諺があるが、虚偽の繁栄と平和の中に宗教と政治と道徳の腐敗する時代は、神から遣される預言者の活動をよび起す。「繁栄と平和」(Prosperity and Peace) が政治の目的として掲げられ、社会理想として追求される現代は、エホバに仕える時代ではなくて、マモン(財神)に仕える時代である。宗教は惰性に生きるのみ。政治は情実にあやつられ、社会は享楽を求めて正義を捨てる。神をおそれる事を知らない知者・文化人は、安易な楽観論を述べて、国民の腹を風のような希望で満たす。

今の代にして神から遣された預言者の声に聞くのでなければ人も国民も人類も破滅の運命を免れないであろう。

（『嘉信』第二十四巻第二号・昭和三十六年（一九六一年）二月）